この偈に依るのであろう。而して、それは次第の如く、身・受・心・法について、ゴータマ仏陀がこの土において、我々を発遣したもう仏語である。

四

人おのおのの境遇によって異なるが、阿難の如く仏陀に近侍して廿五年、多聞第一でありながら仏陀入滅したもうも証ることができなかったが、結集に際して証りしもの、キサー・ゴタミーの如く愛児の急死によって仏門に入りしものは、身無常において、仏陀の大悲に接し念仏したのでないか。

周梨般特は一本の箒を与えられて、煩悩無尽に思い立ち、仏陀の善巧方便に感泣したのでないか。われわれ如き凡夫人は、日常生活の上に、貪愛、瞋憎のはてなきを知らしていただいて、はじめて大悲心の知恵の光にめぐまれて念仏せられる。それは久遠劫来の呼声であった。

五

高僧和讃に、

善導大師証をこい　　定散二心をひるがえし
貪瞋二河の譬喩をとき　　弘願の信心守護せしむ。

この譬説は、前述の法説と合一する。これは偶然ではなく、仏々相念の世界であるからであるまいか。「同朋」九月号所載、曽我量深先生の「すでにこの道あり」参照せられたい。

# 一枚起請文、歎異鈔、並びに自然法爾章に於ける念仏の扱いについて

佐々木蓮麿

浄土教は、その伝統から見て、念仏往生をぬきにしては意味をなさぬと思う。しかし、浄土教が浄土真宗に発展したところに、念仏と往生についての扱いが変遷しているので、その点を一枚起請文、歎異鈔、並びに自然法爾章の表現によって窺ってみたいと思う。

浄土教の念仏を最も簡明に示されたものが法然の一枚起請文であろう。一枚起請文では「ただ往生極楽のためには南無阿弥陀仏と申て、疑なく往生するぞと思いとって申す外には別の仔細候わず」とある。この表現において注意すべき点は、「往生極楽のためには」とあって、念仏行というものは往生極楽の手段という形になっている。ところが歎異鈔になると、「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」とあるから、念仏と救いとが離れず、念仏するところに救われるという意味がハッキリと現わされている。従って往生極楽ということは、念仏して助けられるという現在の事実の中に納められている表現である。これは手段の念仏が目的の念仏に進んできたと窺うことができる。しかし、念仏する主体が自分自身であることには変りがない。つまり一枚起請文で

は「南無阿弥陀仏と申して」とあり、歎異鈔では「念仏して」とあるが、ともに「行者が為す」という立場は一つである。ところが、自然法爾章になると、立場そのものが一変して「弥陀仏の御ちかひの、もとより行者のはからひにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまひて、むかへんと、はからはせたまひたるによって、行者のよからんとも、あしからんともおもはぬを、自然とはまふすぞときき候」とあって、念仏を行ずる立場そのものが一転して「為す」という立場が「為さしめられる」と立場に変っている。ここが浄土宗が浄土真宗に発展した要点だと思う。

而して、ここに「南無阿弥陀仏とたのませたまいて」とある、この南無阿弥陀仏は、口称の行であって、念称是一の意味が現わされていると解すべきであろう。

この念仏行についての扱い方の変遷は、二祖相承から曇鸞相承に移るところで、真宗教学としては重要な意味をもつものと思う。しかし、真宗教義の面では自然法爾章の立場に立たねばならぬが、獲信の面では歎異鈔の立場によらねばならぬと思う。

## 浄影慧遠の浄土思想

安藤俊雄

南道派地論宗の大成者たる浄影寺慧遠の浄土学はシナにおける唯識学派の浄土学の最初の組織として極めて重要な意義をもっている。インド唯識学の祖たる世親の浄土論が北魏の頃に菩提流支によって訳出され、曇鸞の浄土論註も前に出ていたが、論註の根本的立場は四論宗にあったから、われわれは論註のなかに世親の唯識学の思想背景よりも、却って竜樹系の中観派の立場を顕著に感ぜしめられる。慧遠がしばしば浄土論に言及しながら、浄土論註に一度も言及しなかったのは、彼が論註を見なかったためであると推定することもできるが、またあるいは論註が世親の根本的立場たる唯識仏教に合致していないのを不満としたためではないか。いずれにしても慧遠の浄土学は一方において華厳経と十地経論に基いて華厳経の浄土観を系統的に組織するとともに、他方において楞伽経、起信論、摂大乗論等によって各種の経論が説く浄土を唯識学の立場で統一的、段階的に理解する道を開拓した。大乗義章所収の浄土義六門分別の一段は、かかる意味で、シナにおいて組織された最初の華厳的、唯識的浄土学説として重要な意義をもつものである。そこでは一般に浄土をば事浄土・相浄土・真浄土の三種に分け、事浄土に一切法を実有と見る世俗的立場で修めた善根によって生れる浄土、つまり天上界と、出世を求める善根によって生れる浄土の二種を分ち、弥陀浄土が後者に属するものとする。相浄土にも無漏の四聖諦を悟った阿羅漢の生れる浄土と、地前の菩薩の生れる浄土の二種を分け、真浄土にも十地の菩薩の住む浄土と仏の住む浄土との二種ありとし、前者を離妄真、後者を純浄真の浄土と呼ぶ。東浄土は前六識（これを事識と呼ぶ）の不浄なままの信仰対象にすぎないが、阿羅漢の生れる相浄土は前六識において無漏の聖諦を悟ったときにはじめて受用し、